出雲の子持壺集成

池淵　俊一

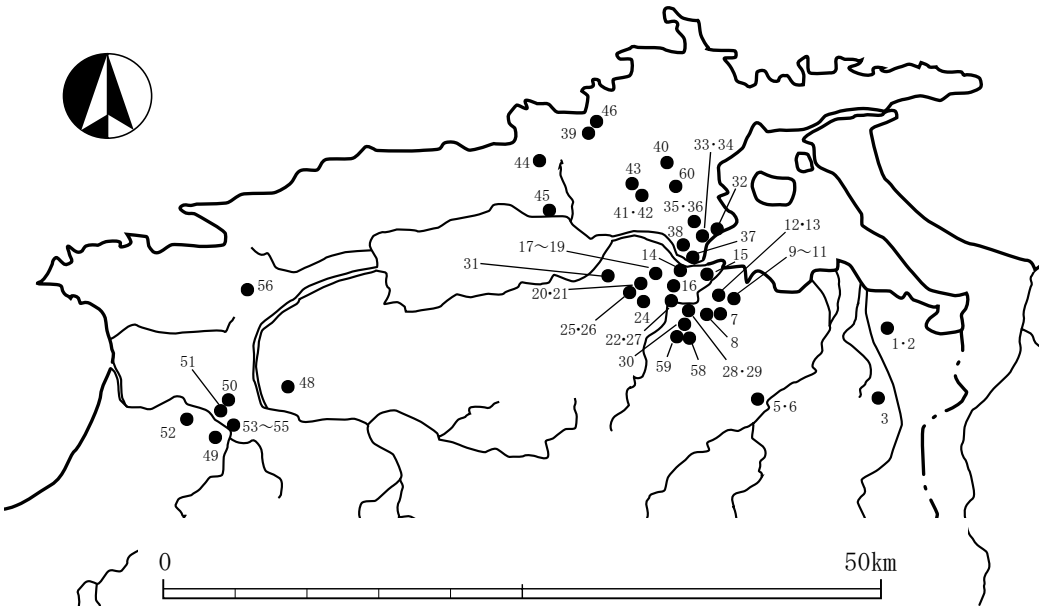
はじめに

須恵器子持壺とは装飾付須恵器の一種で、親壺と呼ばれる壺又は甕にミニチュアの壺・甕等の容器を数個体取り付けた装飾性の高い須恵器のことを指す。今回の集成対象としたのは出雲部出土の須恵器子持壺で、その大半は所謂出雲型子持壺と称されるものである。また、親壺が壺ではないが出雲型子持壺と密接な関係を持つ子持甕等についても関連資料として集成対象とした。なお、誌面の都合上、多量に出土した遺構については、全資料を掲載せず代表的事例を載せるにとどめたものもある。掲載順については、便宜的に旧郡単位で掲載した。

１．研究略史

最初に出雲型子持壺に注目したのは山本清（山本1960）である。山本は山陰の須恵器の地域色を論ずる中で子持壺を取り上げ、円筒埴輪との関連性などその後の研究の核となる重要な論点をこの段階において既に提起している。その後岡崎雄二郎による集成を経て（岡崎1983）、昌子寛光によって出雲型子持壺という名称が初めて提唱され、脚部が裾拡がりで装飾性の高いタイプから円筒形を呈するタイプへの変遷が示された（昌子1987）。その後、山田邦和が全国の装飾付須恵器をまとめる中で出雲型子持壺について触れているが、基本的には昌子と同様な変遷観に基づいている（山田1989）。

1993年には柳浦俊一が山陰の子持壺を集成し、底抜けの有脚Ⅳ類と長胴丸底の無脚Ⅱ類を出雲型子持壺として再定義した。編年については、昌子らによる従来の脚部等の変遷観を批判し、子壺と親壺の接合法や親壺の相対的大きさをメルクマールとし、新古に区分した。柳浦の編年観は、その後の須恵器編年の整備（大谷1994）による共伴須恵器の見直し等の課題はあるものの、概ね妥当である。特に子



第１図　子持壺出土遺構位置図（出雲部）

壺の接合法に着目した点は、単に編年の問題だけではなく、出雲型子持壺の本質を考える上で重要な視座を提示した意味で特筆される。その後、佐古和枝は共伴須恵器の年代観に基づき、出雲型子持壺の変遷をⅠ～Ⅳ期に分けてその変遷を示したが、祖形や系譜の認定及びその変遷観に課題を残した（佐古1994）。

筆者は2004年に柳浦らの業績に基づいたうえ、出雲型子持壺のうち有脚Ⅳ類について検討を行い、3型式に大別したうえ4期に編年した。また地域性や製作地の検討を行うとともに、型式変遷の各画期における背景について、認知的側面から言及した（池淵2004）。同年には山内英樹が出雲型子持壺と円筒埴輪について主として製作技法の観点から検討を行い、両工人の情報交換があった可能性を指摘している（山内2004）。

２．子持壺の大別と型式分類

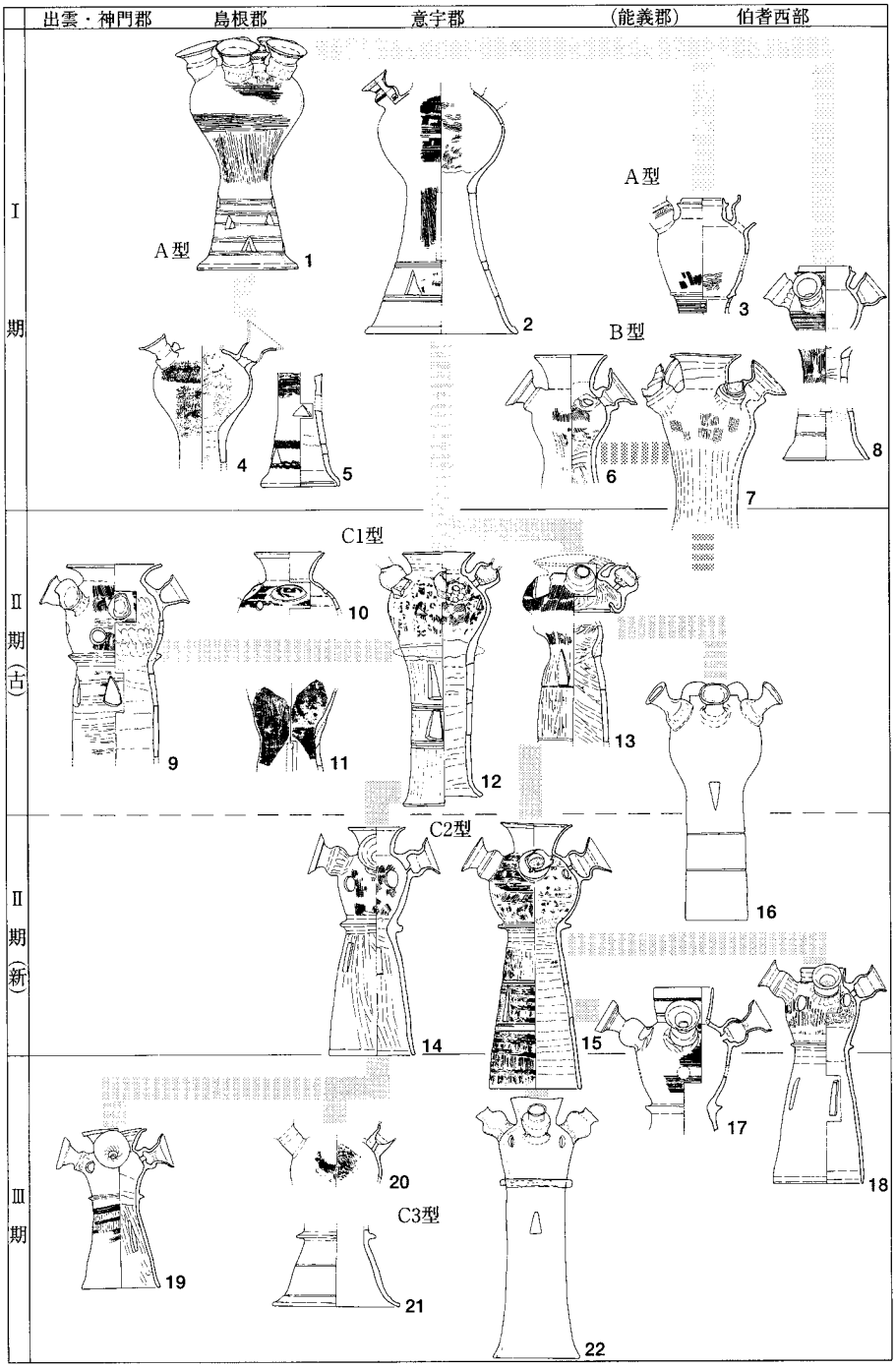
出雲出土の子持壺の大別　子持壺の大別分類は、基本的には柳浦分類に従う。すなわち、子持壺を有脚と無脚とに大別し、有脚をⅠ～Ⅳ類、無脚をⅠ、Ⅱ類に細別する。このうち出雲型子持壺は親壺の底が無い有脚Ⅳ類と無脚で単独で使用された無脚Ⅱ類に該当し、出雲出土の子持壺はほぼこの２型式に限定される。それ以外では山代二子塚古墳で親壺の底を有する有脚Ⅲ類と古曽志大谷１号墳で器台とセットで使用される無脚Ⅰ類が知られているのみである。

表１　子持壺出土遺跡一覧（出雲部：子持瑟を含む）

番号	遺跡名	所在地	形式（柳浦1993）	子壺接合法（柳浦1993）	型式分類（池淵2004）	共伴土器（大谷1994）	備　考	文　献
1	臼コクリＳ－２号横穴墓	安来市佐久保町	有脚Ⅳ類	b・c	Ｃ型	大谷４	子壺のみ	今岡編1994
2	臼コクリＮ－５号横穴墓	安来市佐久保町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型	大谷４		今岡編1994
3	大塚横穴	安来市大塚町	有脚Ⅳ類		Ｃ型	－	口縁部欠落	山本1960
4	伯太町出土	安来市伯太町	有脚Ⅳ類	a	Ｂ型	－	脚部欠損	大谷1989
5	かわらけ谷４号横穴墓	安来市植田町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型			松尾編2001
6	かわらけ谷５号横穴墓	安来市植田町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型	大谷４～５	突帯有	松尾編2001
7	才ノ峠古墳	八束郡東出雲町	有脚Ⅳ類		Ｃ型		突帯有	浅沼編1988
8	内馬池２号横穴墓	八束郡東出雲町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型	大谷４～６		石井1978
9	長廻遺跡	八束郡東出雲町	有脚Ⅳ類		Ｃ型			原田他編1993
10	島田池１区３号横穴墓	八束郡東出雲町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型	大谷５～6a		原田編1997
11	島田池６区15号横穴墓	八束郡東出雲町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型	大谷３～４		原田編1997
12	古城山４号横穴墓	八束郡東出雲町		b		大谷５～6a	子壺のみ	石井編2008
13	古城山横穴墓群大溝	八束郡東出雲町	無脚Ⅱ類	b			円筒埴輪、須恵器大甕と共伴	石井編2008
14	手間古墳	松江市竹矢町	有脚Ⅳ類	a	Ｂ型	大谷３	大井出土品の伝承あり	島根大学考古学研究会1995、島根大学考古学研究室2002
15	的場横穴墓	松江市竹矢町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型			山本1960
16	団原古墳	松江市山代町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型	大谷４		西尾編1989
17	狐谷２号横穴墓	松江市山代町			Ｃ型		脚部のみ	横山編1977
18	狐谷７号横穴墓	松江市山代町			Ｃ型	大谷６	脚部のみ	横山編1977
19	狐谷10号横穴墓	松江市山代町		b		大谷３～４	子壺のみ	横山編1977
20	山代方墳	松江市山代町	有脚Ⅳ類	b・c	Ｃ型			岡崎1983、池淵他編1993
21	山代二子塚古墳	松江市山代町	有脚Ⅲ類、有脚Ⅳ類	b・c	Ｃ型	大谷３		渡辺1983、丹羽野他編1992、広江編2001、池淵編2001
22	岩屋後古墳	松江市大庭町		b	Ｃ型	大谷４	子壺のみ	横山他編1978
23	大庭町有出土	松江市大庭町		b	Ｃ型		子壺のみ	柳浦1993
24	東淵寺古墳	松江市大庭町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型	大谷３		曳野他1989、池淵2004
25	向山１号墳	松江市大庭町	有脚Ⅳ類	b・c	Ｃ型	大谷４		瀬古編1998
26	向山２号墳	松江市大庭町	有脚Ⅳ類	b・c	Ｃ型	大谷４～		瀬古編1998
27	岡田山１号墳	松江市大草町	無脚Ⅱ類	b		大谷３	子持蓋を伴う	松本編1987
28	安部谷古墳群	松江市大草町		a			表面採集、子壺のみ	柳浦1993
29	安部谷第１横穴墓群	松江市大草町	有脚Ⅳ類			大谷４～５	脚部のみ	山本1975
30	大谷古墳	松江市八雲町		c			子壺のみ	柳浦1993
31	二子塚古墳	松江市乃木町		c		大谷２～３	子壺のみ　子持壺でない？	岡崎他編1983
32	大井山津窯跡	松江市大井町	有脚Ⅳ類		Ｃ型		表面採集、脚部のみ	池淵2004、藤原編2006
33	大井岩汐窯跡１号窯	松江市大井町	無脚Ⅱ類？			大谷３～５	山代二子塚古墳例に類似	秦編2009
34	大井岩汐窯跡SX01	松江市大井町	有脚Ⅳ類	b・c	Ｃ型	大谷３～５	子壺二子塚古墳例に類似品あり	秦編2009
35	薦沢Ｂ遺跡	松江市大井町		b			親壺のみ	岡崎他編1988
36	池の奥１号墳	松江市大井町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型	大谷４～５期		中尾他編1990
37	魚見塚古墳	松江市朝酌町	有脚Ⅳ類					渡辺1986
38	朝酌岩屋古墳	松江市朝酌町					子壺？	
39	堀部５号墳	松江市鹿島町	有脚Ⅳ類		Ａ型			柳浦1993・赤澤2008
40	日吉垣の内古墳	松江市西持田町		b？			子壺のみ	島根大学考古学研究会1979
41	菅田９号横穴墓	松江市菅田町		b		大谷４～５	子壺のみ	広濱編2005
42	菅田19・20・22号横穴墓	松江市菅田町	有脚Ⅳ類	b・c	Ｃ型	大谷５～	下層から出雲7・8期の長頸壺	広濱編2005
43	岡田薬師古墳	松江市法吉町	有脚Ⅳ類	a	Ａ型	大谷３	親壺口縁部欠損、子持蓋有	丹羽野編1986
44	牛切古墳	松江市西谷町	有脚Ⅳ類	a	Ａ型	大谷３		柳浦1993
45	古曽志大谷１号墳	松江市古曽志町	無脚Ⅰ類			大谷１		足立他編1989
46	講武向山古墳	松江市鹿島町	有脚Ⅳ類	a	Ａ型		子持蓋有	赤澤編1988、赤澤2008
47	三刀屋町出土	雲南市三刀屋町					子壺	山本1960
48	出西子丸１号墳	簸川郡斐川町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型			山本1960
49	小坂古墳	出雲市馬木町		b		大谷４		柳浦1993
50	上塩冶築山古墳	出雲市上塩冶町	有脚Ⅳ類	d		大谷３～４	複数タイプ、Ｃ型模倣	川上編1986、三原編2004
51	築山遺跡	出雲市上塩冶町	有脚Ⅳ類	d			親壺片	原編2009
52	天神原古墳	出雲市下古志町		d			親壺片、脚部片	西尾編1980
53	三田谷Ⅰ遺跡	出雲市上塩冶町	有脚Ⅳ類	a・d			親壺片、子壺	鳥谷編2000
54	三田谷Ⅱ遺跡	出雲市上塩冶町		a			表面採集、子壺のみ	鳥谷編1994
55	三田谷Ⅲ遺跡	出雲市上塩冶町	有脚Ⅳ類	b・d	Ｃ型	大谷４～５	2区包含層出土	伊藤編2000
56	中村１号墳	出雲市国富町	有脚Ⅳ類	b	Ｃ型	大谷４		未報告
57	島根大学蔵			a			子壺	柳浦1993
58	増福寺20号墳	松江市八雲町	子持瑟	b		大谷１		宮本編1982
59	前田遺跡	松江市八雲町	子持瑟	b			子壺、増福寺20号と接合	川上編2001
60	八色谷４号墳	松江市上東川津町	子持瑟	b		大谷１～２		柳浦他編993

出雲型子持壺の型式分類　出雲型子持壺の型式分類については各論者の案があるが、ここでは便宜的に筆者が提示した分類を使用する。筆者は有脚Ⅳ類について属性分析を行い、各属性の相関関係から、主として口縁形態を指標に概ね以下の３型式に大別した。

Ａ型（島根型；第２図）坏身状の口縁で通常蓋を伴う。親壺スカシ・突帯はない。脚部区分帯、スカシは脚部下半部に集中し、上半部にはスカシを穿たない。子壺は口縁部、頸部、胴部の境界が明瞭な楕形で、5、6個を配す。子壺と親壺との接合法は親壺を刳り抜き底のない子壺を接合する柳浦Ａ手法に限定される。



第２図　出雲型子持壺編年図（S＝1/16）

1：講武向山、2：山代二子塚、3：御所原所在、4・5：岡田薬師、6：手間、7：宗像1号、8：長者ヶ平、9：上塩冶築山、10・11：東淵寺、12団原、13：島田池6区15号、14：向山1号、15：島田池1区3号、16：大塚、17：観音寺、18：上野、19：出西子丸、20・21：山代方墳、22：的場

Ｂ型（能義型；第２図）口縁部が長く外反するタイプで、親壺スカシ・突帯はない。脚部は無文でスカシをもたない。子壺の数、形態、接合法はＡ型と同じ。

Ｃ型（意宇型；第２図）口縁が段状又は直立するタイプで、親壺スカシ・突帯を備えるものが多い。脚部区画は均等３区分ないし２区分で、上・中段にスカシを穿ち下段はスカシがない。脚部には区画の沈線を除き文様がない。子壺は明瞭な楕形のものが大半だが、単純口縁タイプや筒状のものも存在する。子壺の数は４個配置が多い。子壺接合法は底のある子壺を接合後、上から穿孔する柳浦氏のＢ手法が大半でＡ手法はない。

なお、Ｃ型については各属性とも多くのバリエーションがあり、細分が可能である。ここでは親壺スカシが無いタイプを含み子壺が５個以上配置するものをＣ１型、

親壺スカシが円形に統一され、子壺を４個配置するタイプをＣ２型、子壺の退化が進行し、親壺の張りが弱く脚部に円形スカシを採用し、子壺接合部の穿孔が貫通しないなど、粗雑化・形骸化が進行したタイプをＣ３型と呼称しておく。石棺式石室編年研究の成果から、これらはＣ１→Ｃ２→Ｃ３という前後関係で把握することが可能である。

3型式の関係　3型式の関係について簡略に述べておく。まずＡ型とＢ型の関係であるが、Ａ・Ｂ型は子壺接合に柳浦Ａ手法を用い、親壺スカシ・突帯がないなど多くの共通点をもつ一方、Ｂ型は脚部にスカシ・区画文様帯を持たない点でＡ型とは明らかに異なる。現状では若干Ａ型が先行することから、Ｂ型は時期的に重複しつつもＡ類から派生した型式と考えられる。

Ｃ型の成立を考える上で重要な資料は山代二子塚古墳資料である（第5図1～19)。脚部のスカシ配置に注目すると、山代二子塚資料の脚部は上段及び下段の両方にスカシを備えている。通常Ａ型の脚部スカシは下半に限定される一方、Ｃ型は上段のみに認められる。このように、山代二子塚資料はＡ型とＣ型の橋渡し的な位置にあるといえ、このことからＣ型は山代二子塚資料を介して、Ａ型から派生し成立したタイプと理解することができる。

３．編年

編年　以上の型式分類に基づき、共伴須恵器や石棺式石室の編年研究の成果から、以下のⅢ期に編年する。

Ⅰ期　Ａ型及びＢ型が主流を占めている段階。最古の出雲型子持壺としては現状の資料では、口縁形態から講武向山古墳例が最も古いと考えられる。なお、山代二子塚古墳は当該期に位置づけられるが、先述のとおり古い要素を備えつつもＢ手法の採用など新しい様相をそなえ、Ｃ型の祖形と位置づけられる。また当段階には直立する短い口縁で蓋を伴い子壺接合にＢ技法を用いる無脚Ⅱ類（第4図6～11）が既に出現している。

Ⅱ期　Ａ・Ｂ型が消滅し、Ｃ型が盛行するようになる段階。先述のＣ型の細分に基づき、新古に分けることができる。

古相…子壺5、6個配置のＣ１型が盛行する段階で、団原古墳、東淵寺古墳例などがある。無脚Ⅱ類は蓋を伴わず、有脚Ⅳ類と共通する段状口縁タイプ（第3図30）が主流となる。

新相…子壺が４個配置に統一され、定型化が進むＣ２型の段階。向山1号墳が代表例としてあげられる。

Ⅲ期　子壺の形骸化・粗雑化が進行するＣ３型の段階。粗雑化・形骸化の方向は様々で型式学的にはかなりのバリエーションが存在する。山代方墳、的場横穴墓例など。

須恵器編年との関係　Ⅰ期は講武向山古墳例が親壺口縁形態から出雲２Ｃ期前後（大谷1994）に位置づけられ、最も古い。須恵器との共伴関係がわかる資料では、岡田薬師古墳、牛切古墳、宗像1号墳があり、ほぼ出雲3期に限定される。

Ⅱ期（古）については、Ｃ１型を模倣したと思われる上塩冶築山古墳例が伝石室内出土須恵器から出雲3期に位置づけられ、当該期の上限が３期まで遡る可能性がある。その他では、近年判明した中村1号墳例は出雲4期古段階に位置づけられ、団原古墳は出雲4期の蓋坏と共伴し、やや共伴関係に問題があるが島田池6区15号（14号）横穴墓例も出雲4期に位置づけられる。以上の点からⅡ期（古）は一部出雲3期に遡りつつもその中心は出雲4期古段階にあると言える。

Ⅱ期（新）については、向山1号墳例が出雲4期新段階の須恵器と共伴し、島田池1区3号横穴墓出土須恵器の大半は出雲5期に属する。また近年調査された菅田19・20・22横穴墓前庭部例では各横穴墓の初葬は出雲5期までしか遡らない。この点から、Ｃ２型を中心とするⅡ期（新）は出雲4期でも後半期

であり一部出雲5期まで降る可能性が高い。

Ⅲ期は共伴資料に恵まれず須恵器編年との対比は困難であるが、型式学的にはＣ３型はＣ２型より後出することは確実であり、概ね出雲5期を中心とする時期に位置づけられる。

４．分布と製作地

分布　Ⅰ期段階では、Ａ型は松江市北部の律令期の島根郡に集中する。Ｂ型は類例は少ないが、松江東部から伯太、米子にかけて点在し、Ａ･Ｃ型に対し分布が東に偏る。この段階のＣ型は類例が少ないが、意宇郡でもその中枢地に分布が限定される。

Ⅱ期以降はＣ型が一気に増加し、分布も意宇郡だけでなく出雲郡や神門郡など、飯石・仁多郡を除く出雲全域までその分布範囲が拡がる。旧稿（池淵2004）ではこの段階でもＣ型は島根郡には分布しないとしていたが、菅田横穴墓群の発見で当該期には島根郡域まで波及することが明らかとなった。こうした分布動向は概ね石棺式石室の動向と連動していると言える。

製作地　以上のように、Ａ～Ｃ型という型式差については、年代だけでなく分布に明瞭な違いが認められることから、単純な時期差ではなく製作集団の違いを反映している可能性が高い。このうちＣ型については、旧稿では大井窯跡群表採資料（第８図30 ～ 34）を紹介し、Ｃ型が大井窯跡群産である点を指摘したが､その後同窯跡群内の岩汐窯跡･山津窯跡群の一部が調査され､その様相がさらに明確となった。

特に岩汐窯跡では、胴部に文様帯を備える子壺や胴部がよく張りカキメをめぐらす親壺、蓋を伴う親壺の直立口縁部が出土している（第８図17 ～ 29）。子壺に文様を備える事例は出雲では山代二子塚古墳資料例しかなく、他の二つの特徴も山代二子塚古墳例と酷似する。この点から、Ｃ型については最古のＣ型でありかつ最初に大量生産された山代二子塚古墳資料の生産を契機に大井窯跡群における生産が開始され、その終末まで当窯跡群で一貫してＣ型が生産されたと想定される。

Ａ・Ｂ型については今のところ生産地を知る手掛かりはない[1]。分布の違いやＣ型との型式学的・技術的差異から大井窯跡群とは異なる生産地であった可能性が高いと考えられる。

５．出雲型子持壺の使用法・儀礼行為

出雲型子持壺の使用方法や儀礼については断片的な検討しか行われておらず、未だ不明な点が多い。Ａ型については、現在までのところ墳丘に多量に樹立して使用された事例は知られず、出土状況の判明する資料では講武向山古墳、牛切古墳などのように石室内での出土例が目立つ。このようにＡ型については他地域の装飾付須恵器とほぼ同様な使用方法が想定されるが、一方で岡田薬師古墳例のように墳丘外で使用される事例もあり、後述するＣ型の使用法に繋がる使用法が既にこの段階で存在する。Ｂ型については、出土状況がわかる資料は現在の手間古墳例しかないが、手間古墳例を見る限りでは後述するＣ型の使用法と顕著な差異は認め難い。

Ｃ型は石室や横穴墓の玄室内から出土する事例は極めて少なく、墳丘や横穴墓の前庭部からの出土例が大半であり、また使用量もＡ型とは異なる大量樹立型である。このように、Ｃ型はその成立段階からＡ型とは使用法等についても一線を画し、墳丘への大量樹立を目的とした、新たな墳丘祭祀アイテムの一つとして創設されたものであり、その契機は山代二子塚古墳の築造であった蓋然性が高い。

なおＣ型（意宇型）内においても、その使用法・セット関係には時期的な変化が認められる。有脚Ⅳ類ではないが、Ｃ型と密接な関係にある子持大甕である無脚Ⅱ類は、出雲では今のところ岡田山１号墳例と古城山横穴墓群大溝例が知られており、いずれも有脚Ⅳ類は共伴せず[2]、その一方で両者とも円筒埴輪を伴う。つまり、無脚Ⅱ類は当初は埴輪とセットで使用されるのを目的として創出された型式であ

る可能性が高い。一方、Ⅱ期新段階以降においては子持壺が埴輪を伴う例はなく、出雲では無脚Ⅱ類は認められず有脚Ⅳ類のみが盛行する。これらの有脚Ⅳ類の大半には須恵器大甕が共伴しており、これとセットで使用されたと推察される。つまり、出雲の墳丘儀礼行為においては大甕状の土器と円筒状の土器が一貫してセットで使用されており、有脚Ⅳ類Ｃ型はいわば円筒埴輪の代替品として盛行したものと考えられる。Ⅱ期新段階のＣ２型には鍔状突帯や脚部円形スカシなどのように円筒埴輪工人集団からの影響が認められる点も、この点を傍証する。

いずれにせよ、子持壺の使用法については未だ十分な検討は行われておらず、これまでの出土位置の分析に加え、器種のセット関係や前代の供献土器群との関連などを視野に入れた総合的なアプローチが今後求められていると言えよう。

６．系譜と変遷－画期の背景－

出雲型子持壺の基本的属性としては、①底抜け（底部穿孔）、②子壺が甕形という二つの顕著な特徴があり、出雲においては原則としてこの規範は遵守されている。このうち後者について、筆者は５世紀末の子持甕の検討から、甕という器種に特有の胴部円孔という属性が須恵器工人の保持する仮器の認知構造に結び付き、子壺形式として採用されたと想定した（池淵2004）。論の是非は今後の評価を俟つほかないが、いずれにせよ出雲型子持壺の本質は仮器という性質にあり、その始原が５世紀末まで遡る点はおおむね妥当と考えられる。

Ａ型の出現系譜については未だ不明な点が多い。赤澤秀則は古墳時代前期以来の島根半島と丹後地方との密接な地域間交流を背景とし、その祖形が丹後地方の子持壺に求められる可能性を指摘する（赤澤2008）。傾聴すべき見解である。

Ｃ型の成立については、現状の資料では前述のとおり山代二子塚古墳の築造が大きな契機となったと考えられる。この段階で墳丘へ大量樹立するという出雲独自の使用法とともに、様々な試行錯誤のうえ、Ｃ型（意宇型）という新たな子持壺型式が創出され、同時に大井窯跡群における恒常的生産が開始された。その意味で、出雲型子持壺の変遷中最も大きな画期であったと評価することができる。

注

⑴　従来手間古墳出土とされていた資料が大井窯跡群採集品の可能性が指摘されているが、実態は不明である（池淵2004、追記）。

⑵　従来山代二子塚古墳例が無脚Ⅱ類とされていたが、口縁部のみでの判断で底部は確認できておらず、ここでは判断を保留する。

文　献

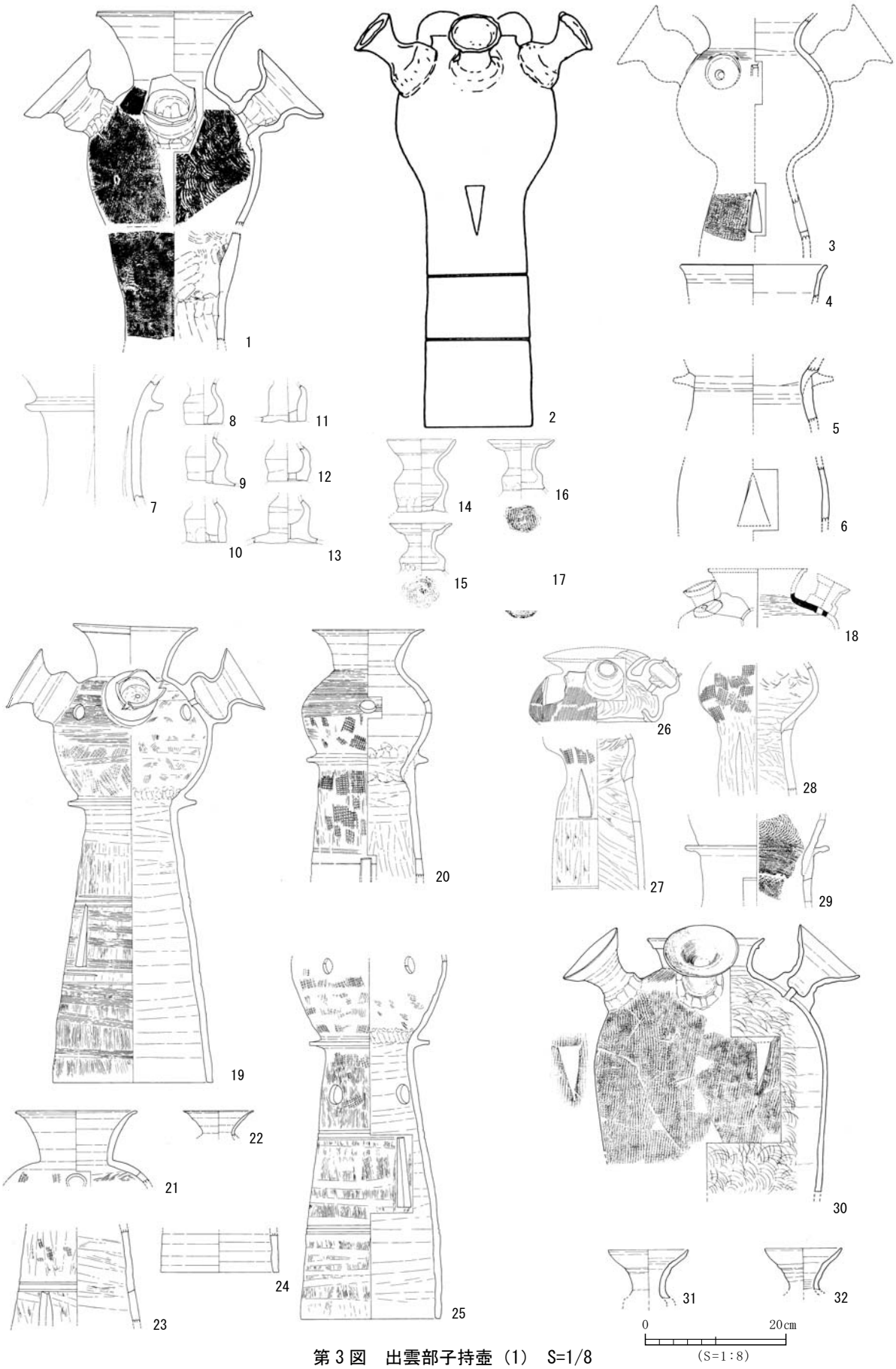
論　文

山本　清1960「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
岡崎雄二郎1983「松江・山代方墳採集の須恵器について」『松江考古』第５号
昌子寛光1987「出雲の子持壺」『古文化談叢』第18集
大谷祐司1989「伯太町歴史民俗資料館保管の遺物について」『松江考古』第５号
山田邦和1989「装飾付須恵器の分類と編年（上）（下）」『古代文化』第41巻８・９号
柳浦俊一1993「島根・鳥取県子持壺集成」『島根考古学会誌』第10集
佐古和枝1994「出雲型子持壺について」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ
大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集

池淵俊一2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集 河瀬正利先生退官記念論文集』
山内英樹2004「円筒埴輪と出雲型子持壺の関係性」『島根考古学会誌』第20・21集合併号
赤澤秀則2008『発掘された国引き神話－古代狭田王国の遺宝－』松江市鹿島歴史民俗博物館
渡辺貞幸1983「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』第23号
渡辺貞幸1985「松江市山代方墳をめぐる諸問題」『山陰地域研究（伝統文化)』第1号
渡辺貞幸1986「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会

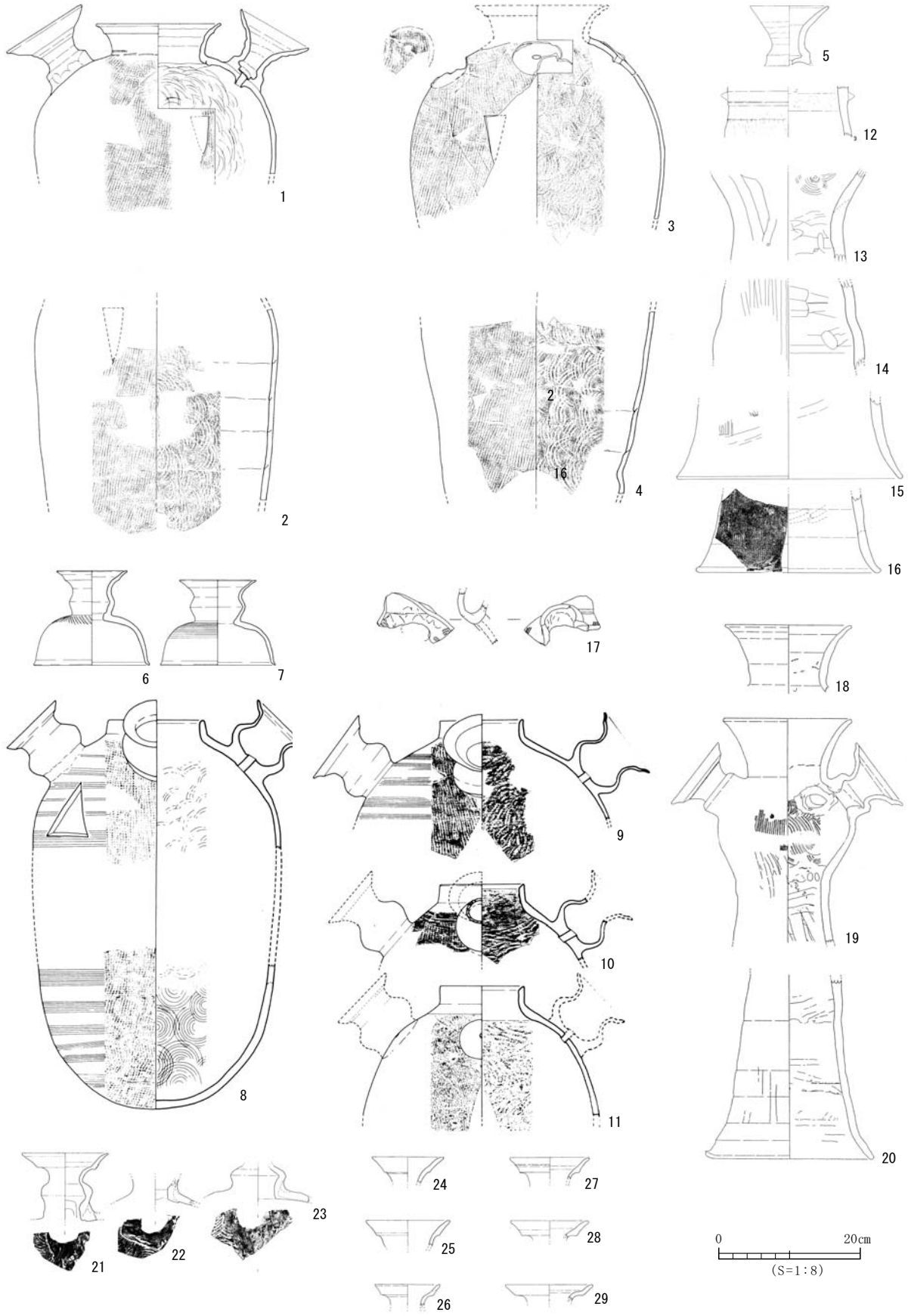
報告書

赤澤秀則編1988『講武地区遺跡分布調査報告書』2 鹿島町教育委員会
浅沼政誌編1988『東出雲町の遺跡』東出雲町教育委員会
足立克己・丹羽野裕編1989『古曽志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会
池淵俊一・松本岩雄編1993『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅸ－山代郷正倉跡・山代方墳－』島根県教育委員会
池淵俊一編2001『国指定史跡山代二子塚環境整備事業に伴う発掘調査報告書』島根県教育委員会
石井　悠1978「内馬池横穴群」『東出雲町誌』東出雲町
石井　悠編2008『古城山遺跡』東出雲町教育委員会
伊藤　智編2000『三田谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会
今岡一三編1994『臼コクリ遺跡・大原遺跡』島根県教育委員会
岡崎雄二郎他編1983『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会
岡崎雄二郎他編1988『薦沢Ａ遺跡・薦沢Ｂ遺跡・別所遺跡』松江市教育委員会
川上昭一編2001『前田遺跡（第Ⅱ調査区)』八雲村教育委員会
川上　稔編1986『塩冶地区遺跡分布調査』Ⅰ　出雲市教育委員会
島根大学考古学研究会1979「日吉垣の内古墳」『菅田考古』第15号
島根大学考古学研究会1995『菅田考古』第17号
瀬古諒子編1998『向山古墳群発掘調査報告書』松江市教育委員会
鳥谷芳雄編1994『三田谷Ⅱ遺跡・上沢Ⅰ遺跡』島根県教育委員会
鳥谷芳雄編2000『三田谷Ⅰ遺跡Vol.3』島根県教育委員会
中尾秀信・藤原裕子編1990『鈩田遺跡・朝酌荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥Ｃ・Ｄ遺跡－島根県松江東工業団地内発掘調査報告書－』松江市教育委員会
西尾克己編1980『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会
西尾克己編1989『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅵ－団原古墳・下黒田遺跡－』島根県教育委員会
丹羽野裕編1986『岡田薬師古墳』島根県教育委員会
丹羽野裕・鳥谷芳雄編1992『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告－山代二子塚古墳－』島根県教育委員会
秦　愛子編2009『岩汐窯跡発掘調査報告書』（財）松江市教育文化振興事業団
原　俊二編2009『築山遺跡』Ⅲ 出雲市教育委員会
原田敏照・勝瀬利栄編1993『御崎谷・土元・清水遺跡ほか』島根県教育委員会
原田敏照編1997『島田池遺跡・鷭貫遺跡』島根県教育委員会
曳野律夫・松本岩雄・内田律雄・三宅博士1989「松江市東淵寺古墳墳丘測量報告（上)」『島根考古学会誌』第6集
広江耕史他編2001『山代二子塚古墳整備事業報告書』島根県教育委員会
広濱貴子編2005『菅田横穴墓群・薦沢砦跡』（財）松江市教育文化振興事業団
藤原　哲編2006『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』（財）松江市教育文化振興事業団
松尾充晶編2001『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター
松本岩雄編1987『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
三原一将編2004『上塩冶築山古墳』出雲市教育委員会
宮本徳昭編1982『増福寺古墳群発掘調査報告書』
柳浦俊一他編1993『八色谷古墳群』島根県教育委員会
山本　清1975「九．安部谷古墳」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会
横山純夫編1977『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅶ集 島根県教育委員会
横山純夫・卜部吉博・平野芳英編1978『岩屋後古墳発掘調査概報』島根県教育委員会
渡辺貞幸編2002『松江市手間古墳発掘調査報告・薬師山古墳出土遺物について』島根大学考古学研究室

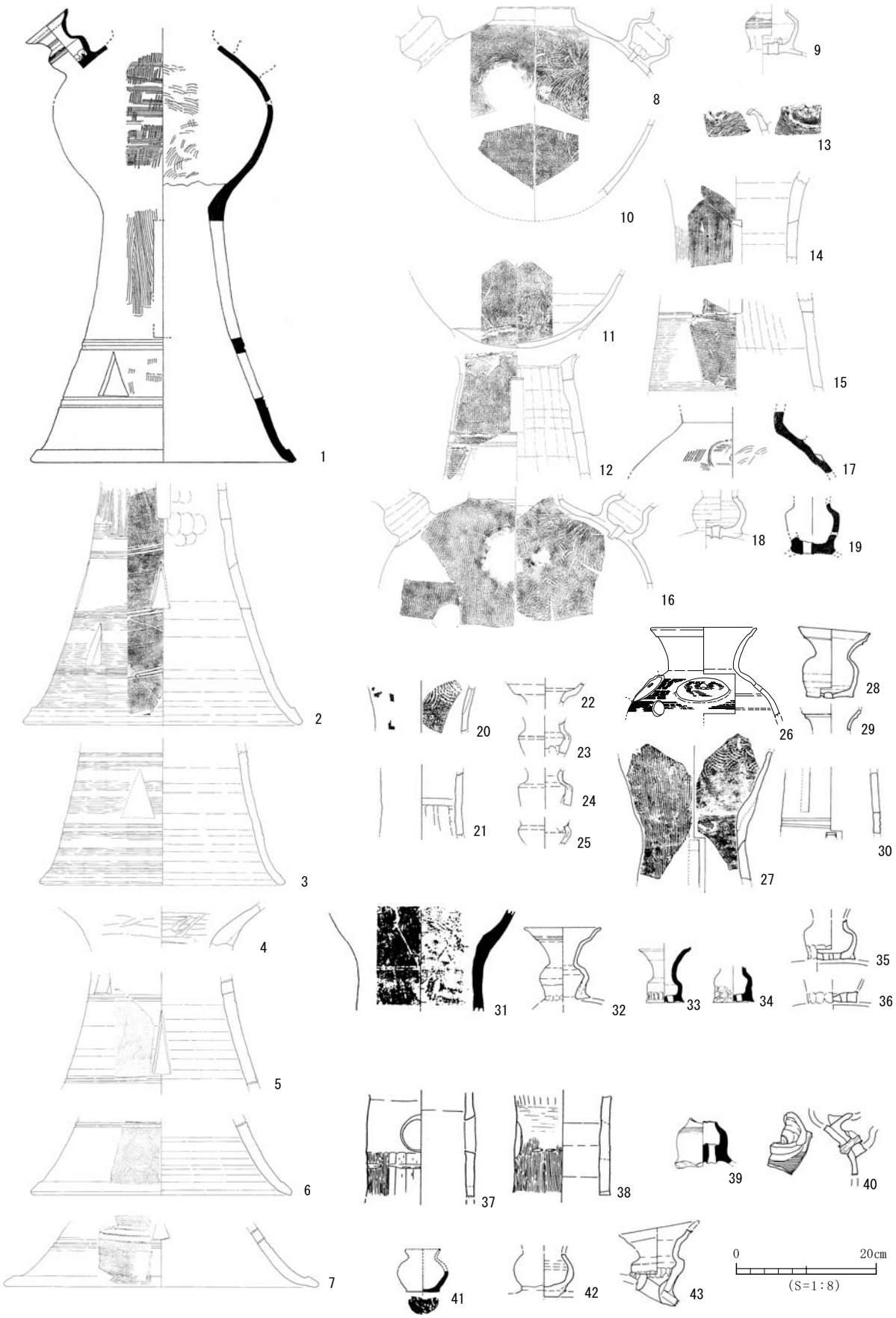


第３図　出雲部子持壺（1）　S=1/8

1：伝伯太町出土、2：大塚横穴墓、3：かわらけ谷４号横穴墓、4～6：かわらけ谷５号横穴墓、7～13：臼コクリ N-5 号横穴墓、14～17：臼コクリ S-2 号横穴墓、18：内馬池２号横穴墓、19～25：島田池１区３号横穴墓、26～28：島田池６区 15 号横穴墓、29：才ノ峠古墳、30～32：古城山横穴墓群大溝

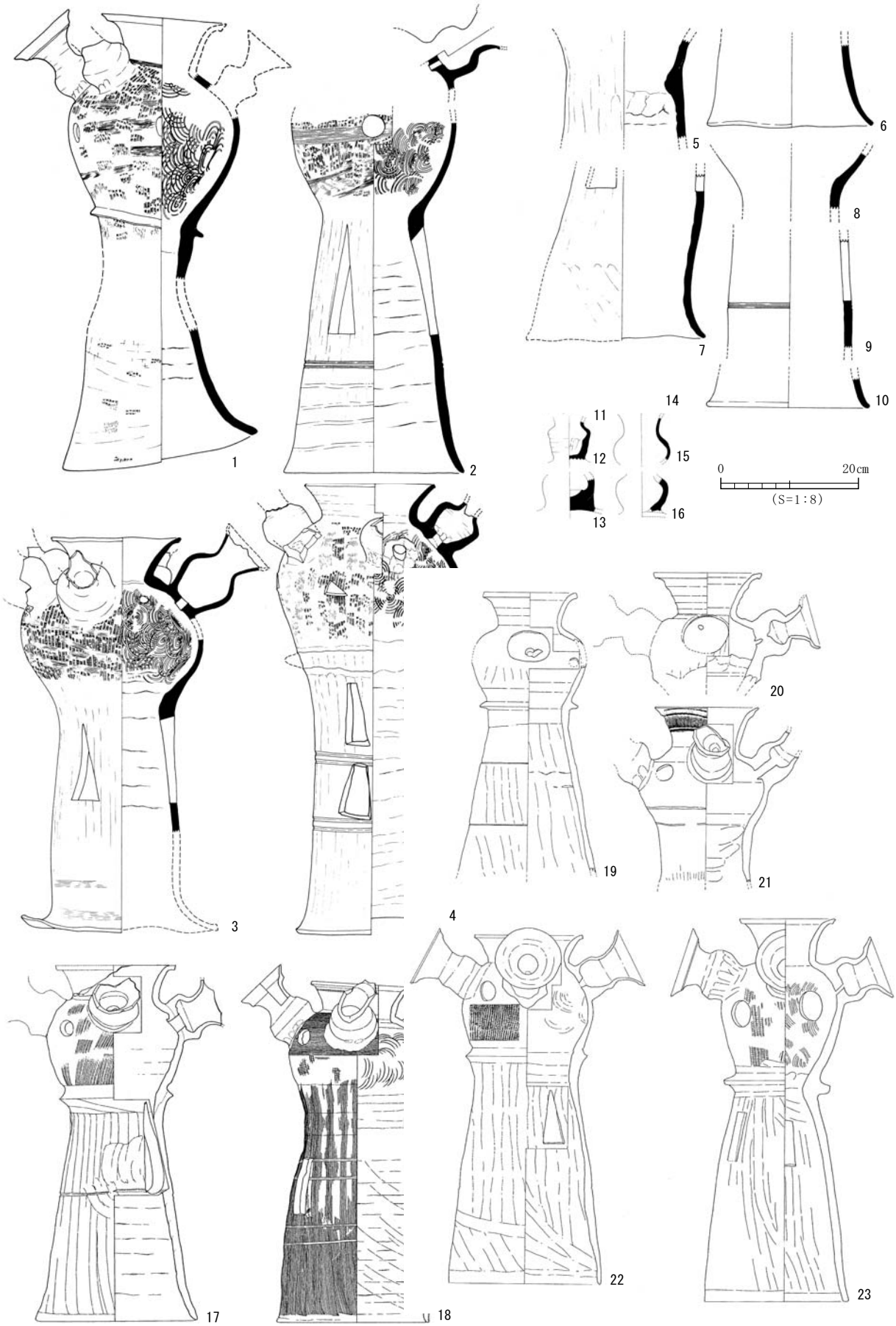


第４図　出雲部子持壺（2）　S=1/8
1～5：古城山横穴墓群大溝、6～11：岡田山１号墳、12：長廻遺跡、13～29：手間古墳

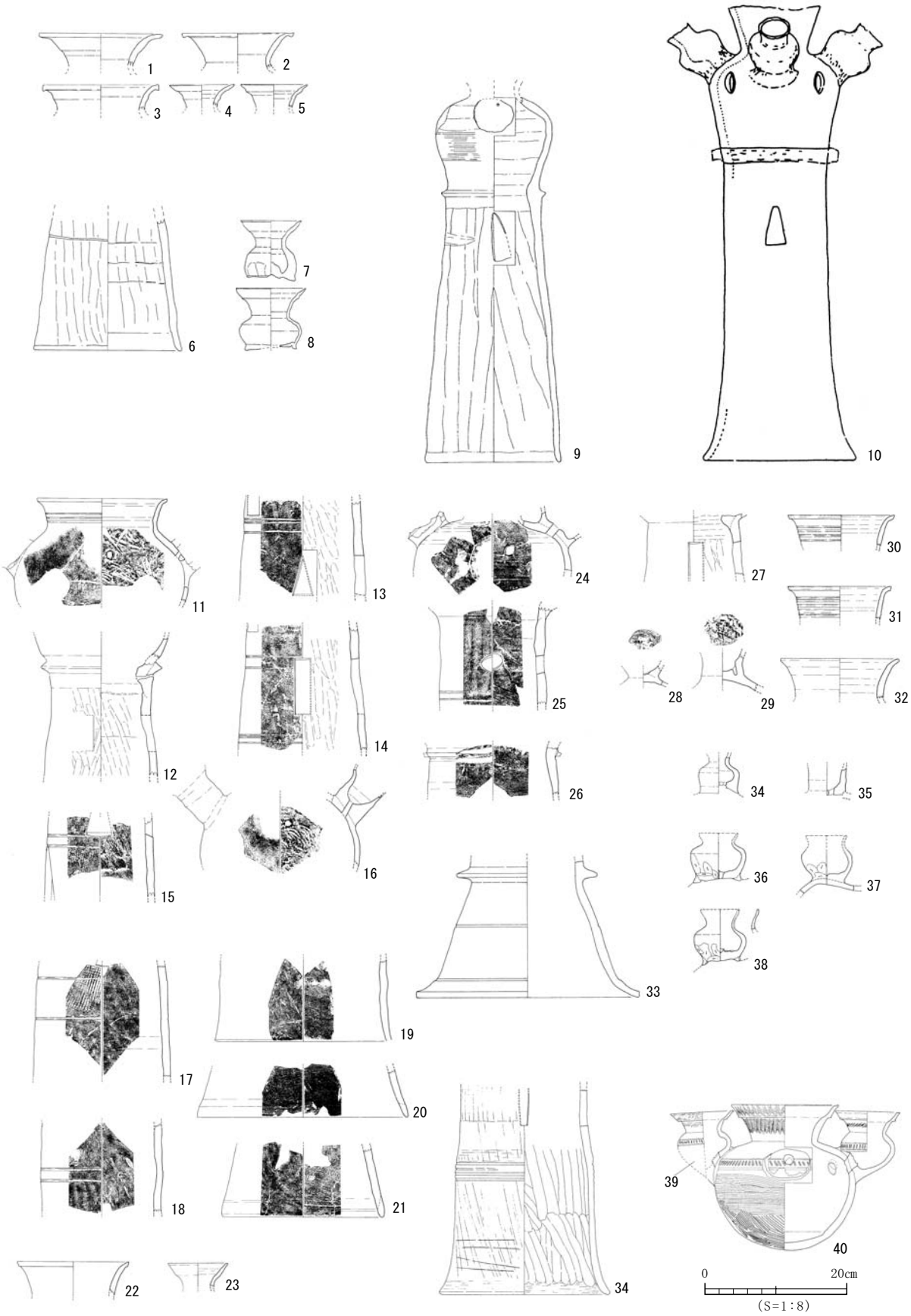


第５図　出雲部子持壺（3）　S=1/8

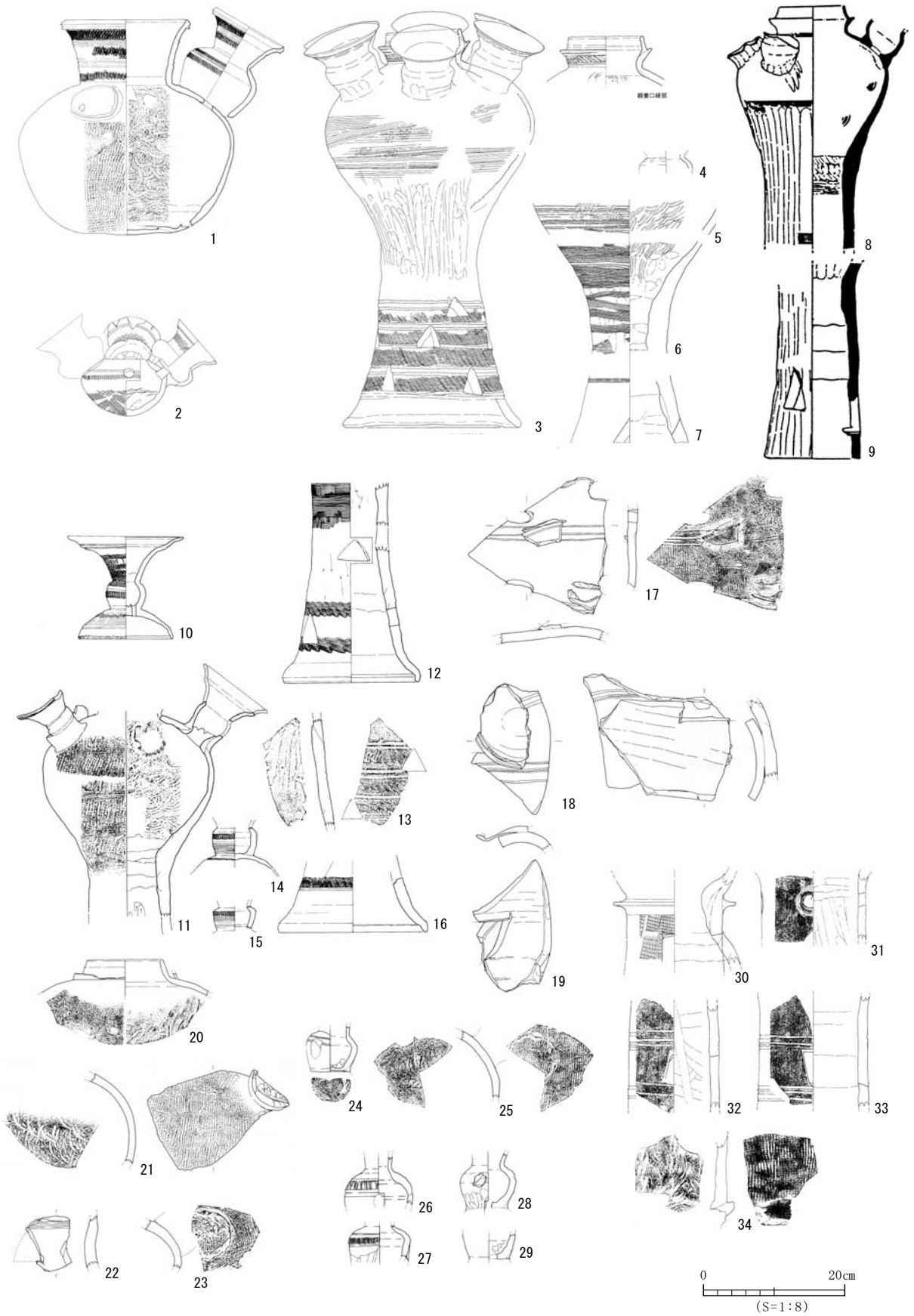
1～19：山代二子塚古墳、20～25：魚見塚古墳、26～30：東淵寺古墳、31・32：安部谷古墳群、33・34：岩屋後古墳、35・36：大庭有、37：狐谷７号横穴墓、38：狐谷２号横穴墓、39・40：狐谷10号横穴墓、41：二子塚古墳、42：大谷古墳、43：不明（島根大学所蔵）



第６図　出雲部子持壺（4）　S=1/8
1～16：団原古墳、17～23：向山１号墳

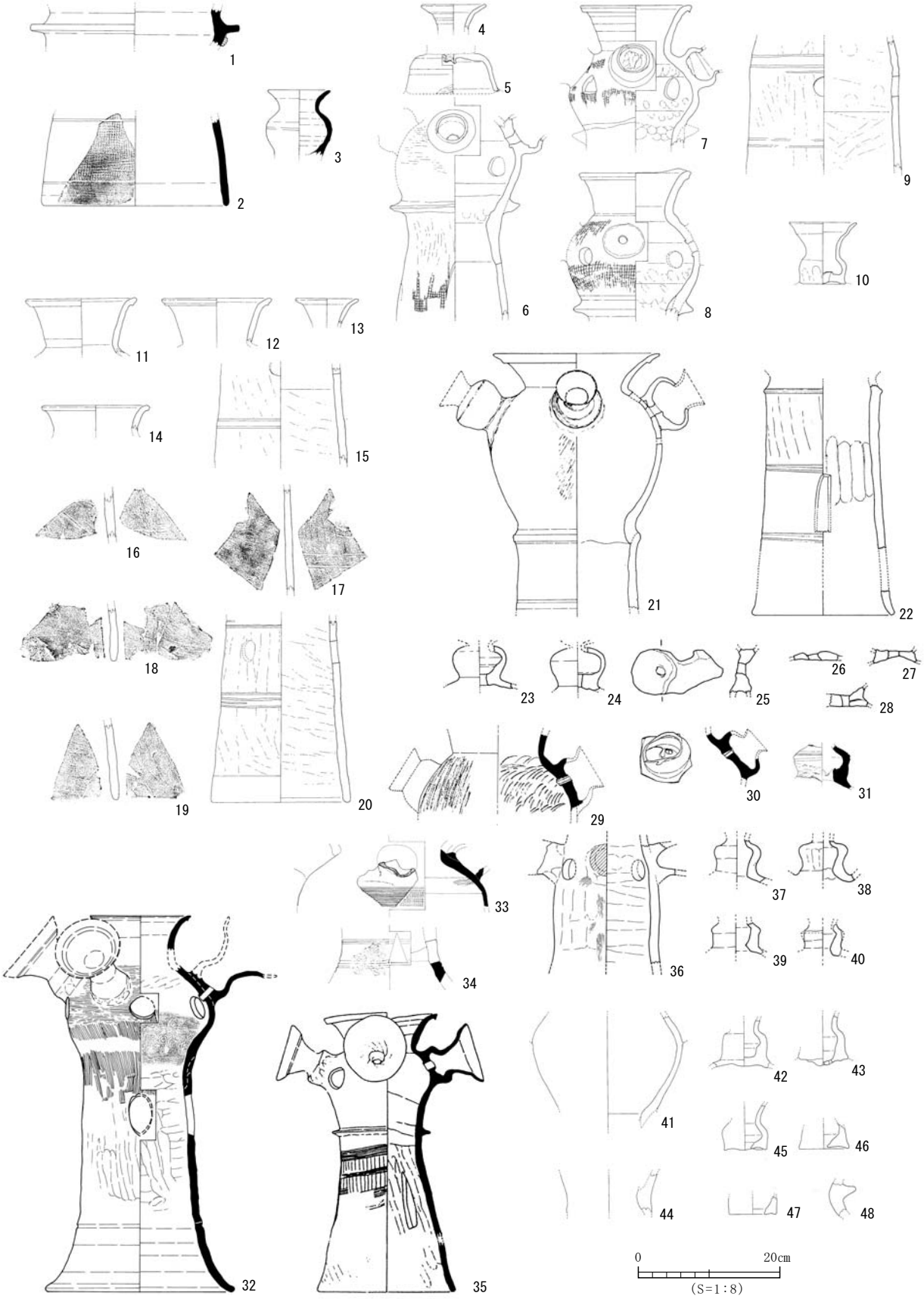


第７図　出雲部子持壺（5）　S=1/8
1～5：向山１号墳、6～9：向山２号墳、10：的場横穴墓、11～38：山代方墳、39：前田、40 増福寺 20 号墳



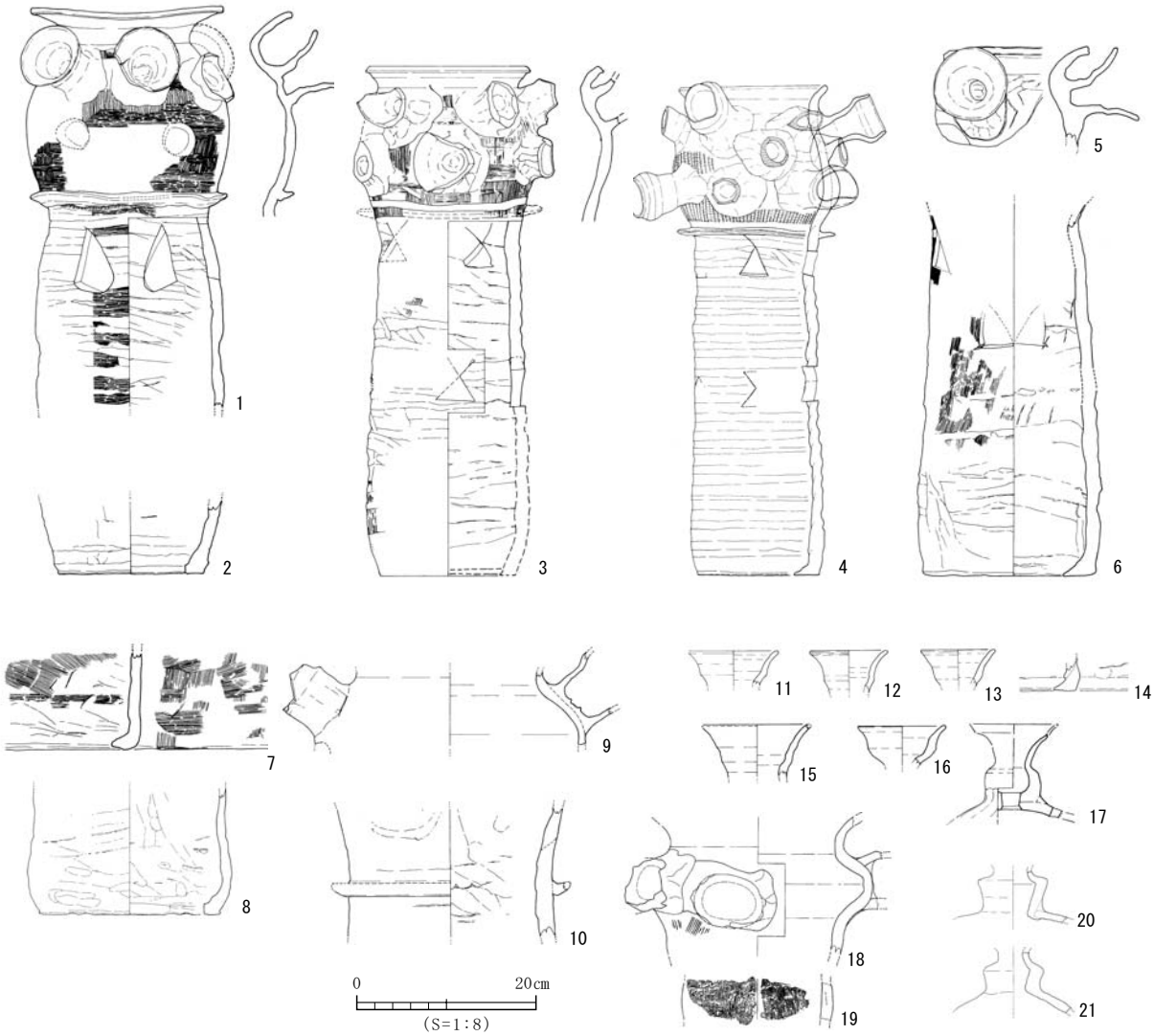
第８図　出雲部子持壺（6）　S=1/8

1：古曽志大谷１号墳、2：八色谷４号墳、3：講武向山古墳、4～7：堀部５号墳、8・9：牛切古墳、10～16：岡田薬師古墳、17～19、21～29：岩汐窯跡 SX01、20：岩汐１号窯跡、30～34：山津窯跡



第 9 図　出雲部子持壺（7）　S=1/8

1 ～ 3：山津窯跡、4 ～ 9、11 ～ 20：菅田 19・20・22 号横穴墓前庭、10：菅田 9 号横穴墓、21 ～ 28：池の奥 1 号墳、29・30：薦沢Ｂ遺跡、31：日吉垣の内古墳、32：中村 1 号墳、33・34：天神原古墳、35：出西子丸 1 号墳、36 ～ 40：三田谷Ⅰ遺跡、41 ～ 48：三田谷Ⅲ遺跡



第10図　出雲部子持壺（8）　S=1/8
1～16：上塩冶築山古墳、17：小坂古墳、18・19：築山遺跡、20・21：三田谷Ⅱ遺跡